

キーワード:バスケットボール、指導力、教員養成系大学

## I. 研究の背景

バスケットボールは、中学校の学習指導要領(保健体育編 2008)で「ゴール型」教材として取り上げられている。これまでのバスケットボールに関する研究では、数的有利な状態での攻防を多く取り入れることで、ゲーム中の状況判断力が向上する等、教材内容に関する研究は多く行われている。教師の指導力に関して、2012 年の中央教育審議会の答申『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』において、実践的指導力を有する教員の育成が強調されており、より高い指導力を持った教員の養成が必要とされている。しかし、バスケットボールにおいて、教師の指導力を高める教育プログラムの開発と実施についての研究は行われていない。

## II. 研究の目的

本研究では、教員養成系大学の学生に対して、中学校のバスケットボール授業の指導力を向上させるような教育プログラムを開発し、その効果を検討することを目的とした。

## III. 方法

本研究は、2014 年 9 月から 12 月に、地方国立大学の教育学部で開講された「バスケットボール」の授業を受講した学生 28 名を対象にした。対象者の内訳は、男子 24 名、女子 4 名であり、中学・高校でのバスケットボールの部活動の経験者は 10 名、未経験者は 18 名であった。木植らの研究を参考にして、中学校のバスケットボールの指導力を構成する要素を、バスケットボールの知識力、バスケットボールの実技能力、指導する自信、師範する自信の 4 つに設定した。生徒が指導を行う模擬授業を全 8 回実施し、指導力を構成する 4 つの能力に関して、1 回目の授業前と 8 回目の授業後に、その変化を評価した。プログラム実施前段階において、評価を行った 4 項目全てで、経験者と未経験者で有意な差( $p < 0.05$ )が認められたため、分析は、経験者と未経験者の 2 群に分けて行った。また、プログラムの効果については、ウィルコクソン符号付順位和検定を用いて評価した。

### 1) 模擬授業のテーマと構成

平成 20 年中学校学習指導要領(保健体育編)において、ゴール型種目の指導で着目すべき内容として挙げられている、「ボール操作」と「ボールを持っていない時の動き」をプログラムの内容に取り入れた。具体的には、「ボール操作」に関わる動きとして、①ボールハンドリング・パス・ドリブル、②レイアップシュート、③ジャンプシュートを取り上げた。「ボールを持っていない時の動き」に関わる動きとしては、④集団攻撃(3 対 3)、⑤集団攻撃(5 対 5)、⑥マンツーマンディフェンス、⑦ゾーンディフェンスおよび⑧バスケットボールの審判法・ルール合計 8 つを授業テーマに設定した。リーグ戦では、バスケットボールの部活動の経験者が審判を行った。

### 2) プログラムの効果の評価方法

#### a. バスケットボールの知識力

全日本バスケットボール協会出版の『バスケットボールの競

技規則』および、平成 20 年中学校学習指導要領を参考に、バスケットボールの基本的なルールと審判法についての問題(19 題)、学習指導要領に記載されている指導上の留意点についての問題(9 題)の合計 28 題を作成した。

#### b. バスケットボールの実技能力

平成 26 年長野県教員採用試験のバスケットボールの試験を参考に、ゴール下シュート(30 秒間)、フリースロー(10 本)、レイアップ(左右 5 本ずつ)、ドリブル(30 秒間)の 4 つの種目を行った。

#### c. バスケットボールの授業で指導・師範する自信

ハンドリング、シュート、マンツーマンディフェンスなど 10 の動作に関して、指導・師範する自信について、自記式の質問紙を用いて 7 件法で評価した。

## IV. 結果と考察

プログラムの前後の得点の変化を表 1 に示した。知識力は、経験者・未経験者ともに、有意に得点が向上した。その中でも、指導上の留意点の知識の得点に関しては、経験者・未経験者ともに向上した。その理由として、学習指導要領に記載されている指導上の留意点の確認を行いながら、授業を進めたことが考えられた。ルール・審判法の得点に関しては、未経験者において向上した。その理由としては、授業でルール・審判法について学んだこと、また、リーグ戦で、ルール違反が生じる度に、その場でルール・審判法を確認していたことが考えられた。実技能力は、向上傾向は見られたものの、経験者・未経験者ともに有意な向上は認められなかった。技能の向上のために、練習機会や試験回数を増やすことが必要であると考えられる。また、より多角的な評価を行うためには、シュートやドリブルのフォームについても評価を行う必要があると考えられる。自信については、未経験者において、指導・師範する自信ともに、有意な向上が認められた。その理由としては、知識力と自信は強い相関関係( $r = 0.64$ )があり、知識力が上がったことで、自信の得点も向上したことが考えられた。

〈表 1 プログラム実施前後の得点の変化〉 表中の数字は(%)

	経験の有無	事前	事後	P 値
知識の	あり	64.3±13.1	89.6±7.8	<0.01
得点率	なし	44.8±10.1	79.4±12.2	<0.01
指導する	あり	74.3±23.4	82.2±13.6	0.16
自信率	なし	43.3±10.8	53.1±13.4	<0.01
師範する	あり	73.3±22.3	79.6±15.1	0.20
自信率	なし	42.9±10.4	50.3±12.7	0.01

## V. 結論

教育プログラムの実施の結果、バスケットボール未経験者において指導力が高まることが示唆された。今後の課題としては、バスケットボールの部活動経験の有無によってプログラムの内容を変えることや、より多角的にバスケットボールの知識力や実技能力を評価する必要があると考えられた。